詞花和歌集

十

和書門 類
二七〇七四 號
一一一 函
一三 架
五六 冊

内閣文庫
和書 類
二七〇七四 號
五六 冊
二〇〇函
三架

内閣文庫		
番號	和 27074	
冊數	56（10）	
函號	200	5

糊などで貼り付けられている部分がめくれない箇所あり

綴じ部（喉部分）の文字など開きが不鮮明な箇所あり

国立公文書館
National Archives of Japan

日本政府圖書
明治十二年購求

詞花和歌集巻第一

春

堀河院御時百首歌たてまつりけるに春たつ心をよめる　大蔵卿匡房

氷りゐし志賀のからさきうちとけてさゝ浪よする春風そふく

寛和二年内裏歌合によみ侍りける　藤原惟成

昨日かもあられふりしはしからきのと山のかすみ春めきにけり

天徳四年内裏歌合によみ侍る　平兼盛

ふる里ハ春めきにけりみよしのゝ御かきか原ハ霞こめたり

はしめてうくひすの声をきゝてよめる　道命法師

春霞たつをまちえて鶯のはつ音をわれやきゝそめつらん

題しらす　曾祢好忠

雪きえハゑくのわかなも摘へきに春さへはれぬみ山への里

冷泉院春宮と申ける時百首歌たてまつりけるに　源重之

春日野に朝なくきしのはねおとハ雪のきえまにわかなつめとや

鷹司殿乃七十賀の屏風に子日したる家
ありけるところをよめる
赤染衛門
おきなさひ宿のひく風し子日の松もうらやまやさん
しける
新院御製
子日すと春の野ことにたつぬれは松にひかるゝこゝちこそすれ
梅花遠薫と云心を
源時綱
吹くかせのをとつれもと梅むらさきかけしの春のせなか
梅花をよめる
右兵衛督公行
むめ乃花にほひを道のしるへにてあるしもしらぬ宿にきにけり
題しらす
俊恵法師
由きえし草葉のめくみかたよる沢にはつかなる駒もとまえ風はわる
備部光雅
もえ出る草葉のうへはをしなへて駒乃あかきさへて春めきにけれ
天徳四年内裏哥合に柳をよめる
平兼盛
さほひめ乃いとそめかくる青柳をふきなみたりそ春の山風
贈左大臣の家乃哥合によめる
源季宗
いさ風は物はとくる（吹しくく）春風にむしやかくしけるやこの池の氷

吉野のやまふきとよめる　源道済

ふるさとのみかきの柳はる〳〵とたかそめかけしあさみとりかな

題しらす　源頼政

深山木のそのこすゑとも見えさりし桜は花にあらはれにけり

京極前太政大臣の家に哥合し侍けるによめる

康資王母

紅の花さくらして毎年はみなみきにしこえてや見るらむ

このうたを判者大納言経信卿はなかれの桜

詩には流るとも云なれとも哥にはよまぬことなりと申しけれは

と申されけれは判まけにさたまりける康資王母のもとに

いひつかはしける　京極前太政大臣

白雲は立へたつとも紅のうすきはなさくらちりにける

かし　康資王母

白雲はさもあらはあれ紅の花の梅(?)てやとたのみけるかな

おなし(?)歌合によめる

一宮紀伊

わきまよふ花に露こめ山かすみ(?)のにほひにそめあへしかな

大蔵卿匡房

白雲と見ゆるにしるしみよしのの吉野の山の花さかりかも

承暦二年内裏歌合によめる

大納言公実

山桜おしむにとまる物ならは花は春ともかきらさらまし

遠山乃さくらといふ事をよめる

前斎院出雲 出羽イ

九重にたつしら雲とみえつるは大内山乃さくらなりけり

たいしらす

戒秀法師

春ことに心をそらになす物は雲井にみゆる桜なりけり

白川に花見にまかりてよめる

源俊頼朝臣

白川乃春のこすゑを見わたせは松こそ花のたえまなりけれ

遠くに花をたつぬといふ事をよませ給ける

白河院御製

春くれは花のこすゑにさそはれていたらぬさとのなかりつる哉

猶こえつゝみの麓乃山のかすみの山花よりも遠

桜花こゝろにのみそかゝるなる

源師賢朝臣

宇治殿の汀のさくらはさかりにおもひやれり

一條院御時ならの八重桜を人のたてまつりけるを

そのおりおまへに侍けれはその花をたいにて

こよめとおほせられけれはよめる
伊勢大輔
いにしへのならのみやこの八重桜けふこゝのへににほひぬるかな
新院乃おほせ事にて百首のうたたてまつりける
ときよめる
右近中将教長朝臣
ゆきさとはまかふ谷わたる山さくらちるをはとまれことしこそ
谷わきてさく花をてことよおほかる
ゆふさくらをよめる
源登平
さく花にてちるをおしみてくらさはやいまはのひもやみらん
たいしらす
道命法師
春ことにみる花なれとことしよりさきはしめたるここちこそすれ
四條にてよめる
贈左大臣母
わかさとは花のちりかひや浅茅生にいつかひとくらしうきみる人
源忠季
咲くよりもちるをみる日はおもはなみなたのやうにおもほゆるかな
さくら乃花のちるをよめる
藤原元真
さくら花ちりかふまてにみるからになほさかりにはかはらさりけり
天徳四年内裏歌合によめる

大中臣能宣朝臣

さくら花風にしちらぬ物ならは思ふ事なき春にあらまし

太皇太后宮東三条にてさとにいて給

家にまかりて侍けるに

まさに花のちりこのさく雪とふりしこされ

みやこにも見えぬはなのいろの家路にかへる

桜を

桜花ちりしく庭をはらはねはきえせぬ雪となりにけるかな

堀河

山さとにわかれし家の庭にさくらの花のちりけれは

まちくらしわかれてをりてゆかしさそてにあり

源俊頼朝臣

とくとくと花みるほとの庭の面は花ちりてこそみるへかりけれ

橘としつなの朝臣の伏見の山庄にて

遠落花といふことをよめる

源師賢朝臣

さくら咲木の下水はあさけれとちりしく花のふちとこそなれ

藤原通房朝臣の家にて人々惜花と

いふことをよめる

藤原範永朝臣

ちる花をしむやいつれの上にかはらねはつらき哉

庭の桜はちりなんことをまつそかなしき

ますかゝみよのさかゆくをみてもなほ海の世をわたれ
さくらはなのちるをとゝめてよめる

源俊頼朝臣

身よ世ておもしろき海の花のいろにやみゆらむ我なのみさくら

落花満庭といふ事をよめる

花園左大臣

庭のおもは流れとみえて雪とみえてかへるさの花の木ぞちるらむ

題しらず

大中臣能宣朝臣

ちる花をせめてかへしと山のみかけのはなのさかりよりもとめむ

寛和二年内裏歌合によめる

藤原長能

ひとゝせにおもひはかりはかりそめに童かさかなれや山桜かな

藤原家房の女御の家の歌合によめる

よみ人しらず

八重さけるひとつもちらぬ山桜のちらむひとやみなかりつとや

堀河院の御時百首歌たてまつりけるによめる

太皇太后宮小侍従

こゝろみにちるらむ花の鳥のなくなりつまこひのきく

新院ゆるしおほゆまじとも枯牡丹ものな

絶ひまにみえてけりなる

関白前太政大臣

咲ちりわかれしはるまてみはやしよ花のかりそめにも見えけれ川之みなか

老人惜春といふ事をよませ給ける

攝政

おしめともなく春の別さへ海さわきれいまよりて夜しらの別哉

三月盡日人のもとにつかはしける

暮ぬれは花をよませ給ひけるによそ哉

給ひける

新院御製

留めにもとまらぬものをしまるゝ春のとまりを

まきれし

詞花和哥集巻第二

夏

卯月乃一日よめる　　増基法師

けふかはる夏ころもきすくとてもおもひしとのこや思は
覧しらん　　源俊頼朝臣

雪乃色をぬすみてさける卯花はさえてや人にうたかはるらん

新院長官にてかくれてかゝる(?)おもかけによみて侍の

まつ人のたつといひしくかきそうとそかく(?)きこえ

人のいつるせくかくれとしよめる

大蔵卿長房

よとやくのきしあふひらすみとはかさしかめつき
神まつりをよめる　　源兼昌

さかきさゝ葉のにほひやまさしうゆふつけの神やつき
郭公を待てよめる　　周防内侍

ひとこゑもあかぬ郭公まつよしらつゝさかり
関白前太政大臣の家にて時鳥のうた
とて十首よませ侍けるによめる
　　　藤原忠兼

郭公なくなくこそはよの中を山をもとめ我身なら

たゝしら波　花山院御製

こゝろあるしら菊おきそへて秋よりさきの世

山寺のいりあひにて作ゝ木のまよ郭公の音よ

御てわすれぬよ絶なゝ

道命法師

世をのかれ家風郭公やこの命くや待らん

世をつらき　能因法師

昔にたちし郭公一声あかぬ宋は今もさとれ世

藤原伊家

新古曉かねてか声をきくあかつきのくやきこえん

大納言公教

あけはあかたちまさる時鳥かたらふ声の山にこそきけ

関中時鳥といふ事をよめる

源俊頼朝臣

あさ川もいなゝかて郭公かけわたる不なきわれ

題しらず　待賢門院堀川

このやまに家にあつまるあやめ風長にうかむや今の山にほとゝぎす

大江の古家の家にて今ぞくなきぬとうよ

源頼家朝臣

夜もすがらたかく鶴かへのかたを明てほとゝぎす待世に鳴

たゝしらむ

皇嘉門院治部卿

みな月をかつまちはてゝ川やしろ世のなかにこそ秋は[illegible]

堀河院御時百首にたてまつりけるさらゞに
よめる

大蔵卿匡房

まれにこそ人もみえけれやのきのはかせにかけてたかくそ(？)家

右大臣の家乃歌合によめる

源忠季

さみたれはおよはぬ水をせきかへしやまの海さへしらん

郁芳門院のあやめのねあはせによめる

中納言通俊

もりやく河風しく今朝はしもや(？)おきてあさ風

藤原通宗朝臣家歌合し侍けるによめる

良暹法師

さ遠き荻ちらすよて吹風は堂まてとりかへるらん

よどむも世ふりてのち荒ちらぬをいそ

しても海を語らまくて

花山院御製

常もへくとも橋ハかわしもむすとたえぬ雲となかれ

みてしこのまゝをとこそよめる

藤原經衡

さくらさく垣ねにまじる梅が枝の花のいろにもにほひぬるかな

贈左大臣の家に歌合し侍けるによめる

修理大夫顕季

猶あかき桜の花さかりつゝあさ露おきてみえぬ花かな

寛和二年内裏歌合に

大貳高遠

おく露もさきこそしぬれ桃の花さかりさへ昔のひとにあはぬ也けり

六条右大臣家に歌合し侍けるによめる

よみ人しらず

桜花やよひの川よをとせでかくわたるとも花のちるらむ

水邊納涼といふ事をよめる

藤原実綱朝臣

風ふけば河なみしろくたちかへるつきのこほりこそすゞしかりけれ

たゆしあり

曾禰好忠

松川のせきのこほりにまくらせしすゞしき夜はゝわすれかねつゝ

長保五年入道前太政大臣の家に歌合し侍

けるによめる

源道済

まかりにも夏の夜ふけて見えぬまに月のかげこそ秋の月

題しらず

曾禰好忠

川上に夕立すらしみくづせくやなせのさなみたちさわぐ也

閏六月七日よめる

太皇太后宮大貳

彦星はわかれやおもふらん七夕のあまりし夏をとりそへるかな

題しらす　　さかみ

下もみちひとつゝちる木の下に秋とおもゆる蝉乃聲哉

こしたく

思乃意もまつ秋と寒乃夢もけふ秋とも○乃れしらぬ

家経

詞花和歌集巻第三

秋

題しらす　　曽祢好忠

山城乃とはたの面を見わたせはほのかにけさそ秋風は吹

ほのくらかに見え侍るさとを大江ためよりと

伊さてこのかわ侍るかれそふいつらしきもの

備部清流

きえぬ秋はとなりしをさゆの露の田乃杜の梢の風

七月七日式部大輔資業かもとにてよめる

橘元任

萩乃えにむすひてさしはへ七夕（のイ）あふよに数ハひくらん

かくかおほく世をへてのちも七月七日のよは待

ぞする　花山院御製

七夕にけふぬきかへて遣はすやかさゝき墨染の袖

長暦二年内裏歌合によめる

藤原顕綱朝臣

たなはたはあさけ出ると思ひねと夢のうちにや別れ行らん

たつしら雲　加賀左衛門

いつはれとなくそあふせも天河あふせは波にかゝるかさゝきの橋

新院のおほせにて百首うたたてまつりける

きのふよめる　左京大夫顕輔

天河よこきる雲や七夕のそらたきものの煙なるらん

寛和二年内裏歌合によめる

大中臣能宣朝臣

おほつかなわかれやすらん天河としに一度こゆる渡りに

七夕をよめる　修理大夫顕季

天河たえ（なイ）橋つくときかさゝきのあさせたえらし舟よ

橋こそつなの山なれて七夕の舟の

をよめる　良暹法師

わか袖とハ稚らしらぬ七夕のあくるもつらしひかきなん

藤原頼綱朝臣

古郷ちかきよのかはさとはふかきあかつきのころ
覚つらし次

祝部成仲

天河そらにかゝる秋をまちたる山しらや半さしつらん

三条太政大臣の家にて八月十五夜よめる

上月といふ事をよめる

源順

よさきよかこやともなる秋の月さへやゝ世まて名をとゝめん

たゝしあり

右大臣

いつみれは同しこゝろの月きよしの秋もしらすてや過らん

家にて歌合しけるによめる

右衛門督家隆

春夏はきゝやはかゝる秋の夜の月さへひとつて此ひさらん

月を翫てよませ給ける

三条院御製

秋よりもあはれにもみる月かけを心あかりの月をたよらん

たゝしあり

天台座主明快

おなしくはあひみる月よのよるの秋の月

関白前太政大臣の家にてよめる

藤原重基

旅ねする月みえのとら山本の下くさもさやかに結ふ
いえの山乃念佛よのやかて月をみるかな
かな　良暹法師
天津風雲吹はらふ峯たかみ雲のうへまてすめる秋の夜の月
京極前太政大臣家の歌合によめる
源頼綱朝臣
秋の夜の月よのひかりきよけれはさまとまれしとへのむしと
宇治前太政大臣家にて八月十五夜の心を
よめる
藤原朝隆朝臣
いこま山よもの残りのくへてわたさるゝ雲ちをわたる月は満

左京大夫家成家にて歌合し侍けるによ
める　隆縁法師
秋の夜の嵐にくもらぬ月をみくもとてさへてもとゝまらぬ
月をまつ川ころはよめる
大江嘉言
秋乃夜の月まちかてに思ひやる心いくたひ山をこゆらん
月浮山水といふ心をよめる
藤原忠通
秋山の清水はくましにこるとややとれる月のかけもなかれん
寛和二年内裏歌合によみ侍りける

花山院御製

わか宿の月にかくれて雲井まて池をそおもふ
たゝしらむ

源道済

思ひかねわかれし野への露のみか浅茅か原に秋風そ吹

大江嘉言

をきの葉にそゝや秋風吹ぬなりこほれやしぬる露のしら玉

和泉式部

秋くれはときはの山の松風もうつるはかりに身にそしみける

曽禰好忠

みよしのゝきさ山かけにたてる松いく秋風にそなれきぬらん

在原棟梁朝臣

松むしの声たに吹しくまつ風の音そすゝしき山風なるらん
さよふけぬらん

源重昌

夕されはまかきも見えてすゝきおほかる野への花すゝきかなつかしくて
法師へまねきてみゆるなるさかの花おりしるさき
きえて侍けるにつかはしける

赤染衛門

秋の野に花みる程のこゝろをはいかにやいはんとやいはん
かへしのうたつかひとてつかはしける東院の宮
小野宮にわきさくの花さかりにて侍ける時

よみける　　禖子内親王

神垣はかさとなし紅葉かゝりてあやにはなや
堀河院九月百首の歌たてまつりけるによめる
　　　　隆源法師
ねやたれぬ人のうへに秋の野にかよひしらぬ
白河院鳥羽殿にて前栽合せさせ給ひけるに
よみける　　周防内侍
あさましく霜もぬきたる萩のはにつゆさへくもり
　　　　敦輔王
秋風に吹みたれたる萩の花ちりぬるをしらぬなりけり

題しらず　　曽禰好忠
秋の野にしきむしろしかくは露にあるらし萩の花かも
　　　　永縁法師
八重葎しげれる宿は夜もすがら虫の音きくぞあはれなりける
　　　　和泉式部
あか虫のひとりねぬる夜の秋の野の
みちのくの宮城のはらのはなならねは
の園なる萩野にほころびの花のうへ
よめる　　橘為仲朝臣
宮城野にうつろひにけり萩の花

天禄三年女四宮哥合によみ侍ける

橘正通朝臣

秋風に露を涙となく虫乃おもふ心をたれにとはまし

駒迎をよみ侍る

大蔵卿匡房

あふさか乃杉ま乃月のなかりせハいくきの駒といかてしらまし

永承四年内裏哥合によみ侍る

出羽弁

きく人のなとやおもふらん霧の籬のたえまにしかそなくなる

題しらす

藤原伊家

秋の花を草の枕にむすひてもまたちりぬへき霜やおくらむ

九月十三夜下月照菊花といふ事をよませ

給ひける

新院御製

咲なから霜にうつれる菊の花下にも月のひかりわかれ

関白前太政大臣家にてよめる

源雅光

霜おくとみえぬあたりは白菊のなかれにうつるさかりなりけり

題しらす

道命法師

こゝろみにうゑし花のあはれにもいかにいふらんとしもせぬ

曽禰好忠

草のはらわけまよへると露霜のおきてのこせる白菊の はな

宇治前太政大臣白河にて見行客といふ事

をよめる　　　堀河右大臣

関こゆる人にとはゞやみちのくのおもひのゆきを結ぶこや

むさしのゝほりかねのかわ(?)そる々よ見えつるのくふ

二しの山乃もみちを見てよめる

橘能元

いくらともみえぬもみぢは嵐ふきしかぬれ仁和寺の山といひけん

寛治元年太皇太后宮の哥合によめる

大蔵卿匡房

名にたかきあらしの毎にもみぢはのちるてふ山はこゝろありけり

題しらず　　　曾禰好忠

当とにゆきての花も見てしがな梅津のはなのいかにさくらむ

春よりも法輪にまうでゝ侍りけるに秋大井河にわ

に紅葉のちりけるを見てよめる

道命法師

嵐吹くあらしの山のもみぢはの雨に秋はしるらん

雨後落葉といふ事をよめる

源俊頼朝臣

あらしふく時雨の空は晴ぬれど風にまかせてちる木葉かな

月のあかき夜をみちのちとそいてよめる

平兼盛

わかまてにくもりこそすれ秋霜に秋乃あのとなれ
一条摂政家障子にわれしるみちのしの
あらくはわかりゆくこえして了りしまん

藤原雅経

秋のよをみちあかすまて網代木にいをのこらさあらくみえ紅葉
しら川霜をこそみれ

大中臣能宣朝臣

もみちはをさきはまつらん宇治のわたりのへのおきまちて紅葉

雨中九月盡といふことをよめる

前大納言公任

へしなる秋のゆくへもしらすともあはれやなそひしらぬわかれの
まやとわかせよ

詞花和歌集巻第四

冬

題不知　　曽祢好忠

なに事もゆきていのらんと思ひしに神無月にはなりにけるかな

楸せらさのちらて冬はひとしほあはれなるかな

家に歌合し侍けるに落葉をよめる　　大弐資通

こゑたてゝわかみをしるやしかのねのちりしくまゝにかれゆくをしらん

題しらす　　藤原家成

ひつそむらさきのまよそのなかれにおちゝりてちるはなそよき

大江嘉言

山かはにちりてなかるゝ紅葉のちしきにみちくまかへぬ

落葉埋水といふ事をよめる　　惟宗隆頼

庭さよとみのきしのとたえしに木の葉のしたにみえなからまし

落葉満庭といふ事をよめる

風吹はならの枯葉のそよそよといひあはせつゝいつちちるらん

題しらす　　曽祢好忠

こからしの音に霜よの風さへておきゐてみれはわか身ひとりそうきよにのこれる

秋は猶木の下かげもくらかりき月は冬こそみるべかりけれ（このまイ）

東山寺にこもりてよみ侍りける

左京大夫道雅

見るまゝに山かぜあらくしぐるめり都もいまやよさむなるらむ

旅宿時雨といふ事をよめる

瞻西上人

いほりさすならの木かげにもる月のくもるとみれば時雨ふるなり

天暦の時の屏風にあじろにもみぢおほく

よれるかたかきたる所をよめる

平兼盛

大井河よわらし吹ぬれば網代にもみぢながれて（まれ）

ひをもかずよめる

藤原長能

わすれじよの雲のかげならにひとつぎかたに

堀河院の時百首歌奉りけるによめる

大蔵卿匡房

山姫の衣やくもるこの雪の

大和守にて侍りける時入道前太政大臣の

淀までて初雪をみてよめる

藤原義忠朝臣

ちよとて吉野の山に入ぬる人のあとはちるさくらの雪

読人しらす　大蔵卿匡房

おく山の岩かき紅葉ちりはてゝ朽葉かうへに雪そつもれる

大江嘉言

日くらしに山ちのきのふしくれしはふしの高ねの雪にそありける

新院くらゐにおはしましける時雪中眺望

といふ事をよませ給けるに

関白前太政大臣

紅葉ちりしこすゑも雪にうつもれて花さきにけり神なひの杜

たいしらす　和泉式部

まつ人の今もきたらはいかゝせむふまくおしき庭の雪かな

歳暮乃こゝろをよめる

観尋法師

あすしらぬ身をまきのとの流にも老いをとしきはおもひわたるか

曾祢好忠

むまつゝら乃をつむよ歳はくれやまとことはのこもりかな

詞花和謌集巻第五

賀

一条院上東門院より行幸せさせ給ひけるに

入道前太政大臣

君か代にあふくま川のそこ清み千年をへつゝすまむとそ思

正月一日にかく見えける人によみつかはしける

よめる

伊勢大輔

みくまのにちよをしつゝ子ハ子きのむかしをかさぬな隠

一条左大臣乃家の障子にかきたるゑに

まかまゐるところをよめる

大中臣能宣朝臣

ちとせまて行末とほき君か代ハいく千代へても人倍書雲

東三条前太政大臣家にて歌合し侍ける

匡房

よめる

君か代ハ久しかるへしわたらひやいすゝの川のなかれたえせて

長元八年宇治前太政大臣の家の歌合に

よめる

能因法師

君か代ハ白雲かゝるつくはねのみねのつゝきの海となるまて

たいしらす

赤染衛門

さゝれ石とてよろつ代をかさねてハいくちとせをかまつのとしへん

三条右大臣殿の屏風の絵に花のもとに

くる人ありてうちなかめたるところをよめる

中務

あそのゝこゝろとめてさくらはなちるをおしむと春やくれなむ

あるはのみちさえのこる花なれハあかぬこゝろにまかせてもみむ

みの日つかひしるへ

きゝつるのりしけ

松風のつゝみをこえてあさなきのとをきしまより千代をかそへて

天喜四年四月晦日后宮の歌合によみ侍

題しらす　後冷泉院御製

かつら夜のこりすくなしつきせぬは君か代（ちよイ）

上東門院屏風に十二月つこもりのよる

ゆきふるところをよめる

藤大納言公任

一とせを（のイ）暮ぬとなにかあはれなる（わくイ）もかよつきせぬは世をならはしに

河原院にて荒たる宿に月かりて方合に侍ける

松陰池にこほる事哉

惠慶法師

泪あとゝふる宿の月にてはなれそこにやとる雲のかよひ

後三条院乃東宮にてましましてよませ給ける

よろこひの哥

君ゝよは久しかるへしわたらひや神しはしらしよろつ代の松

たつねてもなかれてもよ海すてよるへ

大納言経信

住吉のあら人神のみさゝふ雲もつきせしかはしらる御ん

詞花和哥集巻第六

別

参議廣業めしてのちはいよのかみになりてくたりける
きぬはつかはしける　民部内侍

文こゑておほかたのみさをとも待かし◯とつまりていや（らまし）

みちさたにわすられて後みちのくにのかみにて
くたりけるにつかはしける

和泉式部

もろともにたゝましものをみちのくのころもの関をよそにきくかな

左京大夫顯輔加賀守にてくたり侍けるにつかふ

いなつまのひかり　源俊頼朝臣

よるひるとこゝにさへ旅ねすれはおもひのへとさへなるらめ

橘則光朝臣みちのくにの國のかみにてくたり

侍りけるに餞し侍るとてよめる

藤原輔尹朝臣

こまつかさまつのみかこれ老そ長別のためしなかへ

もろともに老の舟のこゝろをいかにしてさそひ

きみかためよゝにいつかは心ゆくへ

藤原道綱

たちわかれもとの心はかはらしをいかなる人の別なるらん

大納言經信太宰帥にてくたり侍りけるにつかはし

けるによめる

津守國基

六とせにそ君はきまさん住吉のまつへき身こそいたくおいぬれ

餞しはへりてよみ侍ける

一條院皇后宮

ある孫まかりけるに思ひ出て物をつかはしけるに扇を

そへてたまはせけるに

わかれちをへたつる雲のためにこそ扇の風をやらまほしけれ

法橋有禅

別路の草葉を道をわけさる衣手を分露そぬるゝ袖に

月こそ人のわかれしやとはさそはれぬ心をのこす月

あるしよあひてよあつ

雲範法師

名残をも雖見えよふかき〳〵心よる秋の夜ちかき旅ゆく

見る〳〵に思ひ行侍るとて人のいさめ侍れは

よみ侍れ

寂照法師

さまかへてまかりし時おなしく法師になりて三井寺にこもりゐて侍ける

人のかりもよ日ころ待てかへる日あるへしと詞ありて

いひける

僧都清胤

たのかさみを君まとへとて我さへにけふは別のかなしき

大納言経信大宰帥にてくたり侍ける時

俊頼朝臣かはらけとりていひつかはしける

太皇太后宮甲斐

なく〳〵もそのこゝろさし〳〵今日ゆかむ日とも知ぬ世よ

橘為仲朝臣みちのくの守にてくたり

侍りけるに太皇太后宮の大盤所よりとて賜

はせける

東路のなかき道にてわかれぬるを〳〵とよいか恋ん

修理大夫顕季大宰大弐にてくたり侍りし
時人々に馬よくしてつかはしける

権僧正永縁

立別にはまつとの松に風はならしるともよの世にも我をわすれな
あはれまた手向かはきゝ人のやとわすれて侍りけれは
つかはしけるよめる

くゝつはひき（くイ）（傀儡麿イ）

たのむへき頼乃別のかたきかなけふ人々をわかれて
（よみ人）

詞花和謌集巻第七

恋上

恋のこゝろとてよみ侍りける　　関白前太政大臣

あやしくも[illegible]のみたはかりはいかにすまして[illegible]

題しらす　　藤原實方朝臣

いつかはわりとはわりて[illegible]しるのやしまの[illegible]て

隆恵法師

[illegible]て[illegible]恋しかはやみて[illegible]

堀川院御時百首[illegible]

[illegible]

大蔵卿匡房

わりなしや[illegible]

題しらす　　平兼盛

谷川の[illegible]のやはき[illegible]

春宮[illegible]日兼香殿女御のもとへつかはしける

一条院御製

[illegible]恋つる[illegible]

承暦[illegible]内裏乃歌合によめる

藤原伊家

[illegible]

新院くらゐにおはしましける時うへのをのことも
にておほみきたまはせて旅泊の恋といふ事をよませ
給ひけるによみ侍りける
左兵衛督公能
あさましやなくてや見えぬます鏡人のつらさをかさねわせは
寛和二年内裏歌合によめる
藤原惟成
へたらぬはゆふかけておもはん人のつらさにおもひわふる
左京大夫顕輔卿の家にて歌合し侍りけるによめる
大納言成通
みな月の哀といはん事かなし人の心のかはるをそ思ふ
題しらす　覚念法師
恋しなは君は哀といはすとも中〳〵よその人やしのはん
涙まてあさき思ひにつゝみかねとそ
賀茂成助
いつまてか人の涙をさそふらんうきをのみこそ思ひかへさせ
題しらす　浄蔵法師
我恋は涙のそこにしつみつゝひとりなけきのおもひこそすれ
恋をあひゝてひとりこゝろしおもひつゝの国に
おもひとつゝ人にしられて物思ふ身のうきよにかはらん

ちりもせぬ　平重盛

よしなやとかく人の世にすみのく事はとにかくに　さりとも

たのしき　読人しらず

うしとみる世をすてゝわか身をしらぬ思ひはなにゆへ

住あそひ思へと思ひのちのよまても我なき

思ひきやいつくこそいきつくる人もなき

能因法師

やまさとの神や此わかしこゝろもさらにきえぬ

わかれしくしおもひわかきちかとい　れの

てつゝ世を送るまゝにわかてよつゝし　すぐ

よきことも世もつねにたゞそのちきりも没

つくりしいおもはでつひつらさきる

前大納言公任

こひ思ひあるかなの中をつくるみ　にあつ

三井寺に住る事もなく京にいてゝ

まつ事もちからさりて心からをさまへて

こわとにきてなれこそちかれなかさわかれ

僧都覚雅

此のたしきる

都へとぬきえへ春の月花もて

さてよめる身まかり七月廿日没

なし宗まく　大納言道綱

古今集さいく東の露をもとたかむこのきさきとよみ侍る

恵慶とてよめり

隆源法師

男なりし世にはさかゆくとものゝふの湯まゐらせし給はんの播磨

大隅の國稲家職の流のくまの山在より播磨

恵慶とはよむとをよめり

又わけしはおほしきくしかくさきさき藤原の恵の限なきまゝ

冷泉院春宮と申しける時百首奉りて

まつわきとかりまうれ

源重之

風をいたみ岩うつ浪のおのれのみくたけて物を思ふころかな

堀河院の時百首よまれけるによめる

修理大夫顕季

まつこひ吉野の山のおくふかみ花のおもかけ

たゝしあり　平祐挙

むかしは桜の花の雲のうへや散しかたよりみえそめにけむ

藤原元眞

いつよりちらぬ梅か枝ちるまて匂へ

春まれてあつさと母のめけり母のさこわたり

宗しれぬさくらはいつこにいつらし哉

道因法師

山桜花斗よさくへき色の山をつてさらなれ

塔一河深雪時くす今よ何なるよ縮覚后文

乃ゆ方よ何もうめとふの白くかつて時なら

をもしと今かしも乃いつのとききて三つこその花

よさしてけにこそしきれ

源家時

霜とをぬ今のふかたつらひておもしられせぬ白菊乃花

紅しなよろつける

大納言公実 ねイ

白菊のうつろふなかの山風にあかつきしとや秋はならん

中納言家してとの家の会りよみ

藤原顕綱朝臣

紅のこれやうつろふへよまさんことの波のいろかはるらんと

書つけし哥

源道済

さ人ほ波て色かは紅よ色する花て色も紅わ

雪つらしもらむのいなか事のおわもん

今よよ返事せよ何なれもつのいつらしもれ

源雅光

くれなゐに涙の色も成ゆけはかはるは人の心のみかは

太宰大弐重家卿の家に哥合し侍けるによめる　平實重

こひしなむ身こそおもへはおしからねうき名をつきせぬ[illegible]

題しらす　道因法師

つきもせぬ君にあひみてたのむなりわれはうき事を頼まむ

藤原道信朝臣

われきくはつれなき[illegible]のみ折[illegible]

ひえの山にて哥合し侍けるによめる　心覚法師

これはとき[illegible]こそ[illegible]

題しらす　大中臣能宣朝臣

み墟寺清古乃[illegible]

よめる人しらす

またこひ[illegible]山寺にこもりて[illegible]

つかはしける

藤原範永朝臣

我よそにおもひしまゝに山川のあさからぬ[illegible]

関白前太政大臣家にてよめる

藤原親隆朝臣

風ふけはもしほの煙方よりになひく人のこゝろとそ見る
たのもしけなし

新院御製

瀬をはやみ岩にせかるゝ滝川のわれても末にあはむとそ思

曽祢好忠

もわ海のあまのそもしおからの人を恋しとおもひ
冬のころ嵐よたのへんとゝひぬる女よそて
ていひ川みえつゝ思ふ

道命法師

かくとたに思ひし見えの口わりとおもひわれもあはれ

家に歌合し侍けるによめる

中納言俊忠

逢ていくひをわかぬやすらはてなにゝおつるなみたや音羽の滝

詞花和謌集巻第八

恋下

人しれすまかりてことゝひける女のもとにまかりけるに
あさくわかれてきかれけれはやかてかへりつるとて
つくおもひわすれさりけれはつかはしける侍きとて

藤原相如

君をおもふ心はおほはらやいつしかとのみすみやかれつゝ

女つかはしける

藤原道経

わかこひはあひそめてこそまさりけれしかまのかちの色ならねとも

女のりとわかるつとめて立かへりつかはしける

いりける

清原元輔

秋をかさね海わたしとみえしまつわたと露よりぬるゝ達え

左京大夫顕輔家にて歌合し侍りけるによ

よめる

藤原顕広朝臣

ちきりをはいまそこそはしらつゝあらぬしもふかの露を頼らん

世の中はくちはてぬへきやとわれなからつらき

ためし

藤原実方朝臣

竹の葉にむすふ露よりあたなるはまたとこのまてしのふ人

あふ〔瀬〕の日の日のありたよりしめらるゝ

よわりてたえわつらふしきる

みな人の命もしらぬ日なれと我はいつとも暮ぬ頼へきなは

よめる〔 〕源

左清門督家歌合によみ侍りよむ

藤原範綱

住吉の松にさへいふ心のまつはまたいまに待つ

藤原保昌朝臣丹後国へ下りけるに

よそのひとつはなれにひとつまちおもはぬのりよし

侍りける

和泉式部

我のみやおもひおこせんあちきなく人は宮古を忘れぬる

そのいひならるものりと〔 〕いひつらしきる

大江為基

拙り事あくて色あるあめ中にまれ射しろかとそあつる
よゐのれ世を海よりてさひ物ことのあさたら
きる月よの夜行しとまりてこきわたる秋にあさ
まつひ流るいくる川

一文紀伊

浦孫くわる露をしやさる上には秋立つあなたら
女乃りとる海中わくこやまるかおやのつうしまい
海にさんなむしあらましもいつのせく僧わくれい
よあく

坂上明範

世拙きむしる定月の成もとのつうぶみなりかまれとこそきけ
あつしとも

恵慶法師

わか事は海つらよりあらつまさく流れゆく我をまちかすけ
蓮恩あへとふ事をまあく

右大臣

浦くともよろ事乱ゆる路子しりまてろ我身うそ
あとこまきまてりの守さけてこころい行
んかわままさ今ろ前栽の露をよろしきあなつ
あそまあり

赤染衛門

もるそいあきさかる露乃子わ世い難ときも秋のうせをおもはゝ
たつ…とも

曽祢好忠

きゝわたりてゆかましおもしろ夜の空のおほかたの月のかけふ さやけき

新院くらゐにおはしましける時清涼殿にて

歌といふ事をよませたまひけるによめる

よめる　関白前太政大臣

こぬ人をまつとはなしに待しらせし人の心のうちに情ある哉

題しらず　和泉式部

夕暮はものゝ思ふ事まさるかと我ならさらん人にとはゝや

月乃わかれわきかる心海よりてさしてゆかるおとゝ

の空かりにてわかれはかれなりにひつらしきか

題しらず　あさきおもてあつもあかつきとをしられ

たゝしらしよみなからしれ

なからへて我さへ人をとかめまし中のかはかりの月やなかめん

　平公誠

おほ事やみなのもとをおもひおもしろく夜にはおもひそ

ゆめみみおもひおもてのかやまさしてたのくもえ

あきの海のくてすかわめるさひさしくみえか

これはたのおりつゝ月ていかにもとせ

　寂巌法師

みわのさきのあはれの風のつれそめかゝやくしをお

たのあくてわきちあとくしとつまやくしよのもか

まつ人の行のとまりをあらなんかはかりにわかゆきてやせまし
てよめる　和泉式部
なくさめのちよわれまさりつゝよハさらぬよ独ねをさらにさそ
かりそめにあくかれしきろおもひのりしつひ山
いひやりける　さうゑん
わかなきゆかりありきのわかみかさねの心とはのちさきかれ
かなひきの女のことを今はかへりてつらきてひ
流かうしよする　清原元輔
さきにつゝ寺ゝしれの月はかほにあまる涙とおりなからなかるゝ
人のよとせぬおもとには川らしきそう

侍子内親王大進
ころもぬきさらしきよくまくになのあよくれねかつわかあく
おもひのたらくあさからきこゝろいつしそらひ
あつさの花の事みよあかて
高階章行朝臣女
おりしいや風ちるもの花あらくよ成もの のかくれさせ
いとしく待まゝるもの大僧正行尊よ
りとく月かはにみれいこし川ほとりすみ
律師仁祐
鶯ハこゝろ花の枝よりも若のはるをおりたちまる

思事ゝもろもろありけるにて
大僧正行尊
よくひと氣の文こゝろはあはれのかるちとおもやなるる
左衛門督家成家にて月の哥よみ侍けるに
めそていひそめていかなる事にわかきぬるてよる
またへさわきころもそのあたこゝろさくとの出来
ちかねて光ま無ふなとつそ世て侍家のあ事
よみける
皇嘉門院出雲
法性寺入道前太政大臣家に月の哥さぬきよみ侍りけるに
家十首合し侍家てよみはてかのまたへきと

いつとくをよみける
中納言国信
あ事もふゝかわあかしかくらちをなとし人のきかれ
藤原仲実朝臣
くもりてしかひとりをきまてまて野中の水をやくみける
関白前太政大臣家にてよめる
藤原基俊
あさちふにけさをく露のさむくにかれにし人のなかや恋
しき
清少納言
かくらかぬるあしくよりひつらしきそく

ほとゝきすなくはしらねとわかさよのよふかきねさめにおと
ひさしく音せぬおもとよりいひおこせる
よふ人へ　返
海とわかはしたこそしらね我恋をよしあしとたにとふ人もかな
中納言通俊
さもあらはいさはかきれはいひつたへきそ
よみ人しらす
さわとても誰かいはんことのはとうするかなしきよ
返し
中納言通俊
まつらぬもとをいさとも思ふことのはをしらすしわれは
かなし我かおもふ人のうへたにまさるはかなき

和泉式部
いつとても人を見し海のかうらしおかつ恋かな
大江公資よりおこせてまいらする
さかえ
女房のもとへまかりて池にこゝかしこ有とおもひいれ
題しらす
よみ人しらす　返
ほとゝきす人はわかれとおもふなきをきことの
あつまのかへ

詞花和歌集巻第九

雑上

所々乃名を四季によせて人々よみけるに
みしま江の春乃心をよめる

源頼家朝臣

春霞かすめるかたやつの國乃ほのみしま江のわたりなるらん

堀河院乃御時うへのをのことも御前にて
哥よませさせ給けるに

源俊頼朝臣

須磨乃浦にやく塩竈の煙こそ春にしられぬ霞なりけれ

おなしく此百首哥たてまつりけるに
よめる
あしたそ花雲のよ見えよりも霞とそれて天気晴る
情歓寺にまかりてきたりしか三月はかり外
よかわのおもかけやとるよそのくもやまもちと
ひところに参議為通朝臣もまかりて
侍ときゝていひつかはしける
平忠盛朝臣
あるしなき宿の花は咲ぬらん我はよそにや見てくらすへき
侘りしわか世のひとへにさくらの花の
さかりにはかならすこやとおもひてよその世
ほとへつ　花山院御製
木のもとを栖とすれはおのつから花みる人になりぬへきかな　ここに
人のりしよ庵をわれきるにさくら花おもひ
よるさくらになれはあかなたおもひのかへ
ひとのりはみる家へ
天台座主源心
ちりぬれは後はあくたになる花をおもひしらすもまとふてふかな
花をおしむこころをよめる
大蔵卿匡房

春くれはをちかたのみなみてよそにくてかひなき名こそ流れ
宇治前太政大臣兄なりけりわかさうときく
くつらしきく　堀河右大臣
君を思ふ人をもうらむものこれもちらむもわれにこそ思はれ
二条関白に人をちかひにもしとはてせん
御うたれんとよめる
小式部内侍
春の夜のこぬ人まちの月をみてかはよのことに前栽のさかり
入道摂政は雲山吹をとつかひてみるとき
ゆかしくゆかしき人をとよめる

大納言道綱母
涙こそこのすまひはさこそあし我ことそおもはましやの影
新院位におはしまし時望居女の御方に
わたらせ給てのちのことしとめして前栽
名さしつきのまませ給へるによめる
大納言忠教
かくしつつ世をやつくさむ花ゆゑにわさと下にをさめてこそわかまさ
故理大夫顕季卿月ごとのつごもりによめると記
人々さそひて太宰馬場にまかりて歌よみ
侍けるに後子内親王の女房二車まいれ

みて出し侍りける夜あかつきかたにまかり
ありけ侍りけるよの女房のくにつかはしける
見わたせはやくものさゝ山とおもふとて月
ことのはしせよとてひとりかへるあかつき

贈左大臣

みなかみのそらにみえてしら雲のたつにまかへる
左衛門督家成布引の瀧見にまかりて
歌よみ侍りけるに

藤原隆季朝臣

雲井よりつらぬきかくる白玉をたれ布引の瀧といひけん

新院くらゐにおはしましける時雨中水草
といふことをよませ給ひけるに

大納言行宗

あまのはのきしのあさゝふかくなりてさをの音にもしられぬるかな

たいしらす　律師済覚

おもひいてゝやとりしやまのおくの椎柴まにもれいつる月かせ

父長實卿信濃守にて侍りけるともに
くたりて侍りけるにあかつきおもひいてゝさらしなの家にて
歌合し侍りけるに

藤原顕盛

あつまなるさ[illegible]みしかとも[illegible]この月[illegible]

月あかく侍けるに人々まいりてよみ侍

けるに月のおもしろく思つゝけてよめる

あはれとし[illegible]

大中臣能宣朝臣

月かけは今宵そまちし独や秋はこよひをあかしつる

冷泉院の御時[illegible]後六条院の[illegible]

月のうへにて侍るをよみ侍けるにおほせ給

ける

小一条院御製

[illegible]月[illegible]の[illegible]

左京大夫顕輔中宮亮にて侍ける時下臈

まうてゝ[illegible]家の女房の中より

[illegible]の中にてわすれぬ事またなくて

よの中をおもひしみわたるみかさ山さしいつる月のかけもかくれし

田家月といふ事をよませ給ける

新院御製

月きよみ田中にたてるかりいほの[illegible]

新院くらゐにおはしましける時月あかく侍

ける夜女房よつの[illegible]にてよませ侍ける

太政大臣

すみのほる月乃光よさそはれて雲のうへまてゆくこゝろかな

あれたるやとに月のもれて侍りけるをよめる

良暹法師

板間より月のもるをもみつるかな宿ハあらしてすむへかりける

たいしらす

内大臣

くまもなくしのたの森のしたはれて千枝のかすさへみゆる月かけ

山家月をよめる

源道済

さひしさハ家出しぬへき山里を今夜の月に思ひとまりぬる

新院殿上にて海路月といふ事をよめる

平忠盛朝臣

り令もあまれとも浪路ちして雲のかゝらぬ月をみるかな

たいしらす

橘為義朝臣

君まつと山のは出て山のはに入まて月をなかめつるかな

堀河院御時中宮の御方にて女房

よ拙やきこえけるよ月の山のはわたる事のかわ

きかくとかんて女房月ハいはかりあるかな

表みるといひ入れてよめる

大納言公実

いかなれはまゆはいつる月かけのみるをもかよ海のせさらなん

たいしらず　　花山院御製

心みにほかの月をも見てしかなわか宿からの哀なるかと

月のおもしろく侍ける夜前大納言公任まうてき

これかれ歌よみ侍ける事侍てとくかへりにけれはあ

なれはまちかねてなかわ侍はきこえはつらしき

中務卿具平親王

こめくしなかきよの月夜はにこぬ人をたのまれぬかなとこそきこゆれ

屏風の絵に山の上に月見たる人あるかた

なかきこころよまれよ

大江嘉言

かく山の末雲かゝらぬ夜めてしありしたゝされ月は見えまし

家に哥合し侍けるによめる

左京大夫道雅

夜とゝもに姨すての山の将に雲きて清ん空にあきの月

山城守にまかりてまうてこさりけること月の

おもしろき夜まかりてこれかきつる人のもとへ思ふ

ことい侍る哥にもよめる

藤原輔尹朝臣

雲ゐにてわれ見し月のかけはそれなからやみのゆとてけ世月なけ

ひさしく君しせぬ人のもとへ月のあかきよ

きゝ夜のひとつゝけゝる

中原長国

月はこれむかしの事にかはれとも我とみし人はなき世や

山寺に侍りけるころ宗延法師に
あひてよもすから物かたりして明の
月のみゆる山にかくれしのちかゝることありてよ
める

琳賢法師

あふ人はおりゐてよを海思ひやる君とくみこの嵐の月

京極前太政大臣家歌合によみ侍る

大蔵卿匡房

わかさの浦雲ゐに松のまさるかな月のさえてくもりなき秋
流くりわかえ海にてさえかりかねの
のおもかけみえておもはれてわすらるゝ月の
いとおもく侍らせ給てよみ侍る

帥前内大臣

何事もあはれなる世とおもひしに月のみそすむ

たのしかれ

高松上

なかつかさ事とおもひしかとおもひいつる月のみかそ
たのみしはいにしへ事もあるおもしろのさやけくは
むかしのかたらん

和泉式部

とふ人のとのにのよりくるかぬと思ひて[illegible]
志らひきとおもふこのいつまりいまん[illegible]
の朔日待ちてのちにおもひてなかれぬる
かんかれしきさとつひにわきろ忍事よりある
あやめ草かわかれしくらん袖の上に移りやの流れに人の
[illegible]
待ちてのちにこころ忍房朔
れとひくなきれはなある
人志れぬ袖にかりつこと[illegible]春の
[illegible]房からひきろねきつて[illegible]

のち待の月のおほろかくれのこけの月
待ことかなしこのひれかとしあかされは思ひ忍事
よそにてかきろ　よみ人しらす
思ひねの夢のうきよをみるからに我もまた待の月か
たのしき　待賢門院堀川
あふ人の志るしは待ちの月はまたやと思ひこそなれ
あはれときく[illegible]この夕月そらによりひとつ実
まちわひて[illegible]
志ほれてきてかなしれそよある　よみ人しらす
たか里にかくるひとつて郭公つるよちのたなかのかたらん

たゞ夜乃ふかくしてあかつきにわかるゝおしさくの坂はまつ
鳥のねをいつはるとてもわかれはしらでいひ
よそひて渡るせきのとをもるとせゝるかひもあらせ
しわかれんはよしあるまじ

清少納言

ちとせふる松のときはに我よはひをわかれの行末は千歳
つらなれと君か千代をまつのはすゑにおい
もろともに君をまつとてゆく末は家
まてとも絹よりのほとゝきすかなる

江侍従

かつなをたのみなからも猶さぬれは思ひ志れはし
たゞしつれ

曾禰好忠

ゆくすゑはたのみをかけん君か雪のやとりにもひきかけ
いつまでのひとつ袖とてもの山のくもとゝせ
さわるれはひとつにしきそ

赤染衛門

あふことをまつにて風のすさみにぬれにしかしるかな
いにしへはわきなかしくのぬれつるわかる袖の露
けさかはとのひかわきなみのなかにやあふ

和泉式部

秋みなおり事なき萩のもとにしまきて露は結ふ
藤原隆時朝臣つかはしける時母をたつね
よろしからぬ事ありて侍けるに
ま侍りきれは忠清かもとより隆方よりあひぬ
きゝてかの母かりにいひつかはしける
藤原忠清
いかなれはおなしみなれの宿なれとさのみ月のすみかはるらん
たゝしら返 さうらん
仏者のおそはよせてうらを流し侍さえ海を[illegible]
[illegible]ありけるこころよまむ

大納言道綱母
かく西にありておもはる涸るらむこ海りし[illegible]ありしに
[illegible]事侍けるころはのあとまて侍ける秋は
[illegible]なおしてあかつきの月のくまなく
侍けるころあはれなるきしくれはとりを
ひとてよめる
赤染衛門
神な月ありあけの空にしくるゝをまた我ならぬ人やなかめん
しのひよもの中をくるころよめる
出羽弁
[illegible]かはらぬ袖もなみたの[illegible]

恋しさのひとつおもひのあすかゆくこゝろをかへしつゝありしよりこそかたらひのまめまてよめる

和泉式部

まちぬるにさこそかはらめとおもふよりくもるひとあるもたゝならぬなかのうれしさよ
おもひきやこひしさのことつひにかくならむとはおもはさりけり

　　　よめる

大弐三位

人の世はやすくひとしれぬ恋のかなしさをあはれともしらぬ人にもしらせつるかな

左大弁俊雅母

中々にまさりのこるをあはれともおもはぬ人のなからひにこそ

長元八年宇治前太政大臣の家にて歌合し
侍りけるにまつのこゝろをしたへるに海辺
の前に見侍りけるによめる

式部大輔資業

住吉のあらひとかみの松なれは神のこゝろもかはらさるらむ
もろ人の願ひわきても道よりのあやうきひきあやうきことも
さまりさ祈やあるところの世をとおもひ侍
りけるによめる

周防内侍

いつかまた祈ともしるかひあやなく草のはにおくしら露のたちかへさむ
冷泉院へたゝ家たれまつりてよませ給

家ら　　　　　花山院御製

よの中にあるらひとなき行のこゝろもさしとたれかおもふ

流ゆし　　　　冷泉院御製

せしへぬ行のこゝろひとつをそへてまことにまとはぬさきんと思

おもひこそとゝらみえけれ　　　　和泉式部

わかれは思ひあへぬ山のそのよたにもおもひなるとおもひのまけさと

津の国はこそとも人にいふへきにこまれてま大細云

名住のわりとくりいつらしとろ

能因法師

ひさかたよ山のはにかたむく我のこゝろをおしむなか

後二条関白とのみさきてよそにてもいかはかりかは

家の中によ給ふまゝにてしらしそ給ふて女

家の中によひ入給ふそ

源仲正

みつゝこむ月ももかけよみつくるをくやひのおもひためのさ　うき

おかしやさとの流あゝにまわまて給ふきろくと備正

源光中将して侍ける人のよろこひ

五月五日まかりてよめる

平致経

春はいつもわかれしはおやなきいつもみる物となほかなしけれ
長恨歌のこゝろをよめる
源道済
おもひかね別れし野へをきてみれはあさちか原に秋風そ吹
陸奥国の任はてゝのほり侍りけるにたけく
まれ雲のりとめてよめる
橘為仲朝臣
ふるさとへ我は帰りぬ武隈のまつとはたれにつけよとか思
よしさ川にて侍けるころすゝの名風[illegible]
へはゝて侍けるよおりいかる事をきゝてくれ

ひなよりて京に侍ける
左京大夫顕輔
かれはつる花のまきのあしさふたゝ[illegible]
御かた内大臣あしよりかゝる時恋しみそ
やすらはてまかりてよめる
高内侍
よのつね都の内にこめぬうらをこいつゝおきしかはさらす
猶にて侍けれは百首よみてまいらせける
よめる
大納言師頼
身のうきはむかし方を思わてつらき[illegible]のことそあはれ

大蔵卿匡房

櫻花まてこそいまさかりの花のかけはすゝきわれ

大納言公任

たきのしらいと
今はむかしのことをひとりおもふそかなしき
小野宮太政大臣のりよりの孫よりたゞの子也
すとぞいひくよみる

清原元輔

おもひくやむもしも無き涙こそあはれとつゐにあらはれ
たつしらに

賀茂成平

ゆくあはぬ身わかるゝ日はよしなけれ

新院のおほせにて百首たてまつりける
よみける

前参議季通朝臣

いとひても我身のうへにあまる子孫
紀氏伯歌仲ひろたまて歌合し侍りて
前月遠懐といふ事をよみ侍りて
久れはつらしき

大中臣歌輔

あふさきの露ゆくまにやと月に見ゆるひとつ
さかりのさかりなわ

詞花和歌集巻第十

雑下

こゝろこそこゝろをはかるこゝろなれ
　こゝろのあたはこゝろなりけり

源俊頼朝臣

わか燒きやはえぬかよの中をあくかれはつるとてこそあれ
　女ともの沢よりゑくつむとてよめる
しつのめかゑくつむ沢のうす氷いつまてふへきわか身なるらん
　四位して殿上おりて侍りけるころ鶴鳴皐
　といふことをよめる

藤原公重朝臣

むかしみし雲井をこひてあしたつの沢辺になくやわか身なるらん

新院位におはしましし時月おほく

ころわかおはしまして月を

書志ご子事をとよませ給ひけるによめる

左近中将教長

みよしののまくらの明かなるわかぬらやとさきとめてたなひくらん

桜花ちるをとてよめる

藤原實方朝臣

しら花よそにも見つつそのまま春はものとおもふかな

世中さはりしきこころもおろかなる

瀟碁法師

ねかひし鹿のなく萩の花の末の露をわけつつ秋の野をこえんとしてわかそてよおもひのおもひ

くとをこそよめる

源親元

花すすきまねくはおほくまねけとも秋の野に心のうちはおもひ

ゆらゆきつつおもはれたるこころもなく

題しらす

四条中納言

よそにのみ見てはおはな末の白露はあつさのさき風のふきたるかな

よの中ハうきにおほえし世をすてゝ
世をいとひすつる

花山院御製

あくしつゝやまふかくすみける何よりこそやしきまれならひなれ
いりあひの鐘の声をきゝてよめる

和泉式部

夕暮ハものそかなしき鐘の音をあすもきくへき身としらねハ
大納言忠教身まかりてのちかねのおとをきゝて
ねふときゝてよめる

前右忠教母

寛なくよ渡のおとつからかへしやまもあかんとおもへとも
ちかきさ事のこゑおほしきこころよめる

法橋清昭

みすの鐘のかすよ鐘をきゝてよめる
夏の夜ハよもすからてらのきこえけるかな
てらくにはれはきこえけるよめる

神祇伯顕仲 女子

このころはまたれしきく寝覚にもやまのはにいる
病おほくてわか身のうへにいかなることもありて
めく

良暹法師

おほつかなくこぬ人をまつ山里に雲をかさねてなかめんとすらん

大江の挙周の朝臣たてまつりてかへり
よみて侍りける

赤染衛門

かへしこの命にかへてもをしからんことは

病おもくなりにけれは三井寺にまかりて京の
侍りける人をききて住吉にまうてけるに

きのふこそやとへとかはなれはおもひよそへて

後もわれはよもあらし

大僧正行尊

このよにはいとふもあはれ梅もちらはかくこそ事たかへし

きのちかりしてかへるよもとらしとそ

人のこころをしらせてはなれはよみける

よみ人しらす

このみをいとはしかりきれはこころえぬ事もあらし

たえてたひ

清基法師

我おもふ事をなけきてかはらすの草木もえかはす

大江以言

わかためにかはらしとかはらはかはりてまかせる

大かたはあはれとよのこころ後撰朝臣

りとくりひけらしそう

良暹法師

さりやまと思ひ侍しかどもとのこれのみわざなし

あつ□しらぬ

賢智法師

瀬川の水上をたづねられしよのなきあかれいつしかあれ

この集撰とて家集にはいく侍られける

太政大臣

ありいやまさの出見わきまれかつさあかしこききるの(なきな)に

周防内侍わまれたかぬつときるてあはれく

こらしるまる

大蔵卿匡房

かれそめ見出こそのやまとかさなる山はてふつけける

法師よろそのちに歌大臣補の家に

侍ると□ある

沙弥寂蓮

かつるお酒(時)世に玉章よ聞事とかされ家にはる

だいしらず　よそ入もの

ありとも(夜)しよとつるは撰あれこれも(なき)あれ

蔭家家の命よ侍りける時大蔵前

れつかいもきこしくせめかされは匡房なり

なりて侍りけれは遠江にまかりくたりて侍りけれは
よみてつかはしける

太皇太后宮肥後

ゆくすゑもやすからぬとおもふにもなみたのみこそ先たちにけれ

下臈にてはへりける堀川院白河院に侍
きさきの宮にとのゐしてよみ侍りけるに

川なりける

大中臣能宣朝臣

此よをはつくりとてこそ黒髪のはなれし時に思ひしかと

白河院位おりさせ給ひける時修理大夫顕季

よつのまてにもさはる事なかれと宣旨のおほせ

それはみなそのころよみつかはしけるとそ

法性寺園基

雲の上に月をさやかにみし人は[illegible]

あらし

修理大夫顕季

さかりに事にふれても位去りけるやうに思ひしかとも

新院くらゐおりさせ給ひてのちさとにてよみ侍りける

こしかたに述懐のこころをよませ給ひけるに

白河院の御事をおもひいてゝよみ侍りける

よみ侍りける

大納言成通

白川の流をむかしのちきりとはたのまさりけり

堀河院の御時百首の哥奉りける中に

大蔵卿匡房

百とせは花にやとりてすくしてきこの世は蝶の夢にそ有ける

むかしめのさくらを世にのこしてよはつきぬるをつらぬ

源義国妻

春ありしかとおほつかなくともうらみなれ

左京大夫顕輔あつまのかたへまかりける時

きこえわたりて旅のそらにたゞなかれけて

いはけらうしきそ

関白前太政大臣

思ひいつるそのかみ山のともし火にまかふ白雲

新院位におはしましし時海上遠望といふ事

をよませ給ひけるによめる

わたのはらこきいてゝみれは久かたの雲ゐにまかふ沖つ白浪

後冷泉院御時大嘗会主基方の屏風に

備中国なかの山をよめる人花つくるあら

かくしつゝよろつ代まてにあふよしもかな

藤原家経朝臣

おほしまてたらく山まてはしる水のなかれてたえぬ

今上大嘗会悠紀方の屏風によめるその国

いくのの山田よりいつる月をおもくかめれはのきにたなひく
人今こそかさねまよふとよめる
左京大夫顕輔
さらに山田よりてゆる月をみえぬ影まさるとよ霧を隔
圓融院御ときおほゐ川院に二たひ行幸
せさせ給ひけるによめる
曽禰好忠
水上のさためてけれは君か代に二たひすめるおほゐ川の水
おほゐ川せき海わかわかもとよめる
宇治前太政大臣

いやまさつきしこくめたりの月まつらん今も数とそ思ふ
くものうへまてもとらぬ月とみそよめる
道命法師
都まておきゆる月と海こほりによみ侍ける時
こわ海よ侍りける時月とてよめる
源兼澄大臣
安らまていてる月とよる時八幡のこえて君おもはれる
信濃守よりてむかへにきたりけるにかきりて
よめる
藤原家経朝臣
かきり秋の月よりてみる時常にかすむ月かな

前参議経教朝臣越後守にてくたり侍りし
よ月かはりて其後月をみてかの国のこと
おもひ出てよみてつかはしけるとて侍るとみえ
事よみける
前参議隆親朝臣
背みしあまの井はなれても雲井より行まてもかはらぬ
御前内大臣にわかれて一夜のわかれとてこそ見
さらはとよはひよりのすみ侍りける
大江正言
思ひ出もなかりしさとの山なれといりぬる月のなこりをそおもふ
三条太政大臣身まかりてのち月を見て

よみ侍ける　前大納言為世
いにしへをこふる涙にくもれはやおほろにみゆる秋の夜の月
むかしあまよとゝもにみし宿にさ侍りける今宵の月の
あかつきよりつらきことをしられける
堀川右大臣
その事と思ひ出てあはれにもおもかけそひて月をみるらん
わかことの右大臣身にしみてよもすからみる
前参議桐也
ゆめならてみしあかつきの君かたはおもひ出ぬへきとこのかけかな
堀川の中納言かくれ侍りて後その秋そての

あはれよのうき世なりけり

圓融院御製

おりひめにかしつる糸のうちはへてとしのをなかくこひやわたらん

一條攝政身まかりけるころよめる

少將義孝

夕まくれこしけき庭をなかめつゝ木の葉とともにおつる涙は

子のおもひに侍りけるころ人のもとにつかはしける

まてしもあり

待賢門院安藝

人よりもなほ物おもふ宿なれは軒のしのふも風にしのはれ

西藏子よとくれておもくときゝてつかはし

しける

清原元輔

おもひそめかれぬとおもひしこのはをいかにせよとか風の吹らん

天暦のみかとかくれおはしまして七月七日

なくさめにとて女房のもとにつかはしける

たなはたの

家ふかき天の河原にたちわかれいかなる世にかまたもあはまし

ぬし

よみ人しらす

七夕のあまの羽衣うちかさね心のうちにおもひわたらん

しらぬまにかはらぬ服とそなりにける

神祇伯顕仲

わきもしや衣よきさとみのあれの夜の袖と我のみぬる

大江匡衡三月かわりて又のとしの春花咲

こそてよめる　赤染衛門

これの春もわか身花も咲よそにたのみれわかのからはは

後冷泉院御時殿上人あまた侍けるよまれ

おしまれよきせんよめる

藤原有信朝臣

波のうへなかしよかろふ中よみさへこちあらてとそかしき

こしてよとろくよめる

よみ人しらす

おほろけのいさとさふ歌なんやうておとさよてかのまいれわ

人の年九日乃誦経文とりかさつけなと

人とふ鐘のこゑこそ哀なれ法のをちかたのゆへと寸なれ

よみおりかわして侍ける母もろきゆへさそれて侍

れうてうつりかわまきれて

四条中宮

やまうへそれそやまかみすへてよれ哀こうかわきぬれ

はるかのさかまよりよつ家く侍ける

よみん人しられ

かくてのこりのよはゝわか明神おもひになしてよはゝきくさ神
おやの京をゆかくなくみをとしてたまへる人を
こゝの事こゝろあるへきにかゝることありて
のわかまゝ法師の身をやつしてそのわ
そひてかゝり給ひしさき
おりにふれてきたる事とありし佛のみちなくなりにしかは
かしのつみきえてこゝろのすゝみにけれはとて
よめる
選子内親王
ありしよりさていかなる事もなけれはよしとのみこそおもへ
信解品周流諸國五十余年といふ心をよめる

神祇伯顕仲
あくかるゝ子をまちし百とせをへてそありけるたのもしき
即身成佛といふ事をよめる
よみ人しらす
露の身のきえて佛になる事はつとめて後そきこえける
舎利講のついてに願成佛道の心を人々よ
ませ侍りけるによめる
関白前太政大臣
よそにのみ佛のみちをもとめけん我心こそしるへなりけれ
左京大夫顕輔

いでゝ月をあはれとしてやまりてゆくをてみまし

常在霊鷲山の心をよめる

登蓮法師

よの中は入る方にのみ風ふきて雲にはなれてすめるあり明の月

大日本帝國圖書印

国立公文書館
National Archives of Japan